

がんばっています

「丸く収める」ということ

大分県中津市企画市民環境部環境政策課環境保全係主任

ふじの しょうへい
藤野 奨平



中津市は大分県の北部に位置し、人口は県下3位の81,132人（令和7年12月31日現在）の市です。当市は豊前海に面し工業や漁業が盛んな中津地域と、耶馬溪の山々などの自然を有する資源が豊富な下毛地域で構成され、都市と自然の両方の魅力を感じられます。多様な地形を擁する市域では野依新池のよりしんいけのベッコウトンボ（絶滅危惧種ⅠA類・市天然記念物）、中津干潟のカブトガニなどをはじめとする希少な生物も多く生息しています。「学問のすゝめ」の著者である福沢諭吉は中津で育ち、「解体新書」の編纂に携わった前野良沢は中津藩で藩医を務める等、先人が醸成した文化資本が受け継がれ、私達の豊かな暮らしに息づいています。



中津干潟

中津地域では住宅の開発が進み、にぎわいが高まっている一方で公害苦情を含めた住民の暮らしにおけるトラブルの相談が多様化・複雑化しています。私がこの係に配属されて4年目になりますが、係に寄せられる相談は毎年一通り

ではないと感じています。事象によって問題が発生するに至った経緯やその原因、解決の方策なども全く異なり、これは公害なのか？単に当事者間の争いではないのか？と思える事象も数多あります。原因者が改善策をとってくれない、相談者がひっきりなしに連絡をしてくるのに忙殺されている中で他の相談の対応や日常業務をこなさないといけないので、個々の事象に向き合う時間が取れないジレンマを抱えられている方が（私も含め）多いのではないのでしょうか。ある程度事例のパターンを知って、この相談の場合はこのように対処していこうという道筋を立てながら対応していくことも必要なスキルですが、パターンに固執して四角四面な対応になると、相談者も原因者も納得させられない結果になることもあります。

以前寄せられた相談に、高齢の方がごみを焼却処分していて煙に困っているというものがありました。同様の事例は複数件あるのですが、いずれの原因者も自分で移動するのが困難な状況になっていたり、本来の方法でのごみ出しが難しくなっていて、様々な理由をつけてごみを燃やして処分していました。発生する煙で迷惑を被っている方がいる現状を、原因者と地区との関わりが少なくなってしまうという問題もあり、単に

野焼きによるトラブルとして片付けるのも解決には結びつかないものと思われるものでした。

私たちは近隣の住民の方に状況の聞き取りを行い、普段の原因者の生活状況や支援してくれている人との関わりを把握するようにしました。話を伺っていく中で、近隣住民の方も原因者の暮らしぶりを見るにつけ、こちらに何らかの被害が及ばないかという不安以上に、これから原因者が不自由せず生活していけるのかと心配に思っているということが多くありました。一部の原因者には元々地域で頼りにされるようなポジションにいた方もおり、生活の変わり様に驚いているという言葉が上がることもありました。

この聞き取りをきっかけに、近隣住民の方が原因者の方のごみ出しに協力していただけるようになったケースもあり、地域の結びつきを再認識する機会になったものと感じました。

また、公害苦情とは異なりますが、令和5年の豪雨災害での対応が私の中で印象に残っています。被害が大きくクローズアップされていたのが、氾濫が起きている河川の上流にあたる地域であり、そちらでの消毒対応に注力しなければならぬと考えていました。実際に寄せられる相談にはその地域とは大きく異なる場所からのものがあり、「すぐに対応してほしい」と相談を受けたものの、大きな被害が出ている地域を差し置いてそちらの対応に当たるのは、一個人の気持ちとしては釈然としない思いがありました。しかし、実際に現場を訪れてみると、その場所は著しい大雨が降ると家屋や田畑が水没してしまう状況にありました。先入観を持って対応に当たってしまっていたことを恥じ入り、現場を見て問題に向き合い、私達がそれに対して何を行っていくかを考えるのが重要なのだと改めて考えさせられました。



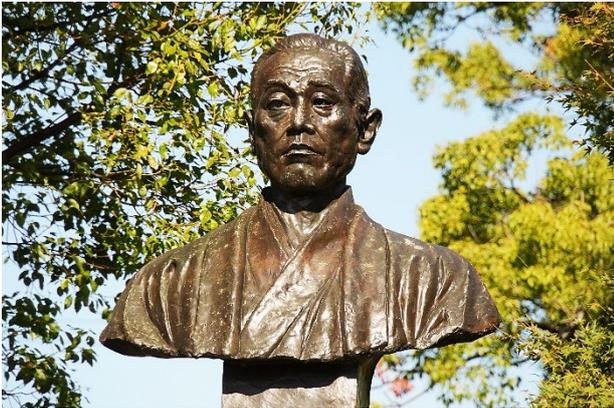
はちめんざん

八面山と中津からあげモニュメント

NHKでバラエティー生活笑百科というテレビ番組が放送されていました。この番組では公害苦情はないにしても、近隣住民とのトラブルなど身近な法律問題が取り上げられ、お笑い芸人の方がコント調にトラブルの内容が紹介した後、パネラーになっている芸能人の方がトラブルに対する見解を述べ、それを踏まえて弁護士の方が法的な見解を答えるものでした。私達も、所管する条例や規則については厳格に運用していく必要がありますが、その前段階、すなわち「この問題にどのような決まりが当てはめられるのか、当てはめられないのか」を判断する時点では、パネラーの方のように気づいたこと、感じたことを出し合いながら能動的に問題の本質を捉えていくのが重要なのではないのでしょうか。半ばおせっかいであるような意見でも、解決するための糸口になるかもしれません。勿論おせっかすぎても解決策を見誤ることにつながりかねないのですが、番組では大抵パネラーの方々の意見が割れて、複数の見方が提示されるようになっており、これは複数名で様々な意見を出し合うことの必要性を示唆しているものだと考えています。

福沢諭吉は「学問のすゝめ」で「学問の本趣意は、読書のみならずして、精神の働きのあり」と記しています。学びは学んだだけで留めてお

くのではなく、それを周囲に広めていくことが重要だと解せる言葉ですが、私達の業務も様々な事例を知ってから問題に取り組むという点では、心がけとして常に持っておきたいものです。福沢諭吉は生まれや学びを得た場所が関西ですので、揉め事があれば生活笑百科の司会の笑福亭仁鶴師匠よろしく「四角い仁鶴がま〜るく収めませ」という様なことを言われるのかもしれませんが。四角四面な対応でなく、問題に対してそれを解決できる方法で融和させること。角のあるもの同士のそれに丸みを出して、妥協点を提示することが、業務の中で行えればと思っています。



福沢諭吉旧居の胸像